

留学報告書

社会基盤学専攻 修士1年

土居遼太郎

留学した動機

専門である水分野について勉強するため、ミュンヘン工科大学への留学を決めました。ドイツは、周辺国と国際河川でつながっていたり、地下水が他国とつながっていたりと、島国である日本とは、水をめぐる環境条件が違います。このように前提条件が違う国で、水マネジメントについて勉強することが、今回の留学を決めた一番の理由です。

留学準備期

今回、半年間の留学をし、なおかつ修士課程での2年間の在籍期間を延ばさないようにするため、留学前までに、修了単位の大半をとるようにしました。また、ドイツ語についても1学期間、文学部のドイツ語の授業を履修して準備しました。

渡航について、滞在許可などは事前に取得することはできないため、保険の加入などがメインの準備となりました。今回特に困ったのは、保険です。ドイツで滞在許可を受けるにはドイツの国民健康保険に加入しなければなりません。その一方で、東大からは、日本の付帯海外の保険に加入しなければなりません。さらには、東大から義務付けられている OSSMA への加入もしなければならず、金銭的にも、手続きの複雑さ的にも非常に大変でした。

留学期

ドイツは手続きが非常に煩雑な国でした。私は以前にもスウェーデンへの留学をしたことがありましたが、それよりも格段に手続きが大変でした。まず、渡航後には、入寮手続きと入学手続き、その後、住民登録を済ませた後、銀行口座の開設、健康保険への加入、そしてついに滞在許可の申請と、手続きが続きます。これらの手順は、順番が違うとうまくいかないそうです。

留学中は、私は授業の履修がメインでした。水分野の授業を2つ(Water Management in Mountain Region, International Waterright)と、ドイツ語(German as a Foreign Language A 2.1)を履修しました。

留学終了準備期

留学の終了時には、開始時と同様の手続きを、反対の手順で行わなければならず、非常にバタバタとしました。これらの手続きは、出国1週間前からしか始められないことも、忙しくなった原因の一つです。

生活について（寮、街、言語）

私の住んでいた寮は **Stiftsbogen** という寮で、学生が多く住む寮群のうちの一つに住んでいました。部屋にトイレ・バスがついていて、キッチンのみ 8 部屋で共有というタイプの寮でした。**Stiftsbogen** は比較的新しく、きれいで設備も恵まれていました。また、私の場合は隣人にも恵まれ、よく料理をシェアしたり、共有リビングスペースで一緒に映画を見たりと、充実した時間が過ごせました。また、隣人にサッカー好きが多く、週末にはみんなですoccerをするなど、非常に楽しい寮生活でした。

ミュンヘンの街は、都会ながらも温かみのある町で(気温は低いですが)、中心街で一番高い建物は教会である、という事実からも、伝統のある風景が残っていることがわかります。ミュンヘンは、「人口 100 万人の村」といわれているほど、都市の中にも田舎の面影が残っており、ベルリンなどの他の都市と比べても、人が暖かい印象を受けました。

言語については、多くの所で英語が通じる一方で、スーパーマーケットや、小さなお店などでは、ドイツ語が使えた方が良い場面も多々ありました。私は、ドイツ語の学習にも力を入れていたため、使える場面では積極的にドイツ語を使おうと努力しました。伝えようと努力すれば、理解しようとちゃんと聞いてくれる人が多いな、というのが、私がミュンヘンに対して抱いた印象です。

留学前後の変化

留学を通して、小さなことには動じないようになったように思います。例えば、留学以前には、他国への旅行には前もって準備をし、何か予定と違ったことが起きたり、自分にわからないことが起きたりすると、ストレスに感じていましたが、今回の留学を通して、小さな予定外の出来事や、自分にとって未知なものに出会っても、すぐにはストレスに感じなくなったように思います。

最後に、今回のドイツ留学を実現できたことに感謝申し上げます。留学支援課の皆様、専攻の先生方、事務室の皆様、業務スーパージャパンドリーム財団様、家族友人ほか、ご支援くださった皆様に感謝いたします。